紫家七論 附系圖

藤原爲章撰

目錄

才德兼備
七事共具
修撰年序
文章無雙
作者本意
一部大事
正傳說誤

尾張州田原爲章撰給藏
文明文庫
杉山文庫藏書

紫家系譜

閑院左大臣冬嗣公第六子
内舎人正六位上
贈太政大臣正一位
良門

利基 従四位上右中將

兼輔 従三位號堤中納言
歌人

雅正 一名タヽ 従五位下刑部少輔
雅依惟誤

歌人 爲頼 従四位下大皇太后宮亮
母右大臣定方女

伊祐 従四位下讃岐守

頼成

従四位下因幡守
實具平親王男

今按紫日記に中將の云々とあるのは
此人なるべしとて引かれたる人と見
るべかりけるにや平家物語に云々
或説に中將宮具平親王へ仕へたる人
由然るべし

爲時

正四位下越後守或作越前守
儒者　歌人

惟規（ノブノリ）

従五位下式部丞
母常陸介爲信女

紫日記に云のごとく或説丞とのふ人のわらはなれば史記などの文をも
伝聞せしなり
後拾遺集に云　父のもとに迎侯に侍りけるを母まかりくだりて報くるに
又云　父の許に迎の車伝りけるを母まかりくだりて報くるに
新勅撰集に云　藤原のぶけりが迎侯へぐりけるに
続後拾遺に云　迎侯まかりくだりしとき

惟通

従五位下安藝守

定選　阿闍梨

女子　紫式部　母同惟規　嫁左衛門權佐宣孝

今按宣孝卒後仕上東門院

河海抄云、尊卑分脈云、藤式部後二位倫子官女也、相継而陪仕上東門院、又云、源氏一部の中に紫のうへのまきをかくる紀氏

[illegible]

今按、紫日記云、たゆまつ[illegible]、公任[illegible]

[illegible]

[illegible]、河海抄の此説を引て又摘て宣孝[illegible]

長保三曰二十又卒と云、紫日記を今世考るに、長保三年曰月二十又日宣孝卒して、後三曰又文をかりやりあ[illegible]て、寛弘二三年の頃[illegible]文仕へ[illegible]

[illegible]、源氏をのゝ[illegible]

[illegible]七論の中に紀氏[illegible]

系圖異本道長妾也後嫁宣孝と云ふ傳説の誤

父宣孝
女子　賢子　後一條院御乳母　嫁大宰大貳高階成章因号大貳三位

[illegible]

父同上
女子　弁局　後冷泉院御乳母

栄花ものがたり楚王の夢はてゝ　万寿二年八月三日　後
冷泉院御乳母をいとゝ云　大夫はかの弁
むすめ紀成親がむすめ　越後弁　右馬頭　後の御
けうとつけゝる　こゝ
大夫　上　左馬頭　右馬頭　兵部卿　左衛門督
御りつ　成親　万寿二年　ころ　御乳母
なりたる　こゝ
又殿上　見参　長元四年　九月二十日　上東門院
より　給供　ころ　一の車　尼　人　弁　命婦

き近命婦　少将尼君　二車　侍　後の弁　越後の弁
のめと　大納言平少将　英雄の小弁　御車の尼
こゝ　宣旨　三位　こゝ
むすめ　三位　内侍のかみ　大武三位　あり
叶　御乳母　大武三位　無　乳母　母　成親が
名　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　紀　の　橘
母　長元四年　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ
ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ

さて夜の御ぞ　後普光園院　拾芥抄良基作　云　紫式部が源氏　白氏が文
集　身　そへ　ぬ　事　一　二　三　後京極どの
おぼしたる事也

此後系統などの、沙汰なきもの、等のたいぞうもあるべし。

○熊澤氏の孝經外傳或問に云、うら人の源氏物語の好色のみをつくり物がたりなるべし琴の琵琶の撥を引ごとの、ハつゞかぬ日なきかくいとく好色のおこハ作り物語にて、作ハ和歌なる実なるべし。古代の改易禮

七論

其一　才德兼備

凡女德とも、婦人のみなるべし。夫をとりかくるとも、ならんいりけるまゝにて女にてハ大和りなるべしいとも婦人なるべし。たゞ〻いとうへなる。源氏物語を作るべし。紫式部が英才をもつて、其實德をいとぎたるべし。物語の本をもつくるべし。式部が才をもつて、式部が才をもつてこれをもつて、物語と。如何ぞ紀記を

よりて其家象をもつて、其事實を考るべ。やはり

人ハ人もあく女德為の賢婦なり。夫物語の

一歩の手一人のこ
紀したる書を
見るひとをれ
けまず終りを
絶つせーあを
ぶしあり人をけ
まずあるぶおと
しよの却こ形人
まーるを用と
いひ下のおるこ
さーるを俗と
い一好き人情
のおむりの手
まず好を好き
をもつるまお

うへくぐひるるつをいもで紫上のらうくく
却りるるる却るる却りるるる用をあるく。
四石のうへのむるたりのるへをくでるもるる
里はりの移るでせば茂盛のたるきのかやちを
くいてもくへ石しめる朝敵の流れかるく名
主印こ移へるむるづるのうへは言うく人これ
けきうをのづ是絵角の君は父文の遺戒を守
しるるあど振るの婦徳を紀し殺上弓元はづ
なるをるりづけて実るるきるめるバく警戒を
るりたる出るなるる武旅が白物紀てなるるへ

七論

て内ふ礼乗
風俗をひの
こせと好き社
物るるをつを
るるして武
の遺風礼乗
ふ言実るる紀亜
るる言意ふ
るして吉の中
は源氏まるむ
人物るふ好き
のあるちなる
せり源氏の実
るるり紀の紀
好るあるるふ

ぶるもるるむるて物語よりまるて。こるるるかるるて
城あるふるるれるるるむ人もたる他の場はやるるのこ
却り人をたる人ぞ本人の歌舞ハ偃師が工るなる
るるをるるるるるるる。
赤かの見紀をよみて其大概をかげ侍るべし。
紫日記ぞまるて人をそわるかるふやをるるるるを
周ひんるふかるるべいるるをけるおりるでまるる我
さるに人をるるよれ。世をそるる紀るよるるの
紀をれるるるる。るるるかるるるる。
るる後。人を紀るる。意を見るるる。るる紀人

綱をうちくらべ
ごとく。世れ
まつれ源氏を
見る人も綱のこ
ちをしてあり き
ぬちゝびに成
又をのゝこと
うばりまして盃
をとるあるを又
しるしとしたる上
古淳素の風
儀礼正法実の
あり。五行の作
あり終りて秘
曲源氏をやど

情。手ならくもかへりをたるべきなるべし。
又云。やゝもせば。おしてもるゝねざるをまれかるたち
歌をよみいで。あるいはまたはさてはてはまた成
かしこをおもひもとる人ふたりもいとあはれ。
わざあり。
又云。ゆゑぶつるべくたるの人の面だゝく事なき
まことにあるべきほどの人ごひにきて。ねたるひぐちなに
ぶらうしずけきたるをいとゆづるべく見
ゆるこゝぼまうこと。ひあへて。ゆるるせつぐき事を
さへ。我仕
ゆるつるふひせの考るはべかりきるようむ。

まれるもの。
○又云。神事祭
礼の方法衰れ
服服装衣のこ
きうもたるべ
まことに珠勝
の方角あり。其
時代の頭の中
わ源氏の大事
今は諸説
上の大略
向乃ゆく春

中にて人の中まで。つとそはいと面白り。紀事も作
日とゞいとやはりく。ゆう海ゞ紀人ふ。ひとやく
なるべし。そのゆゞ紀うらく家ひと好りて人の
まんてへうきけるだ物のつるもをのうく待。
ちるゞとも物のうるくそうそう人かかて。ただ
家おろれたてるもゞを見て。人を見る
なるもあり。うきを見れ家物りばまゞと
乃人ゞ。そうゞ。ひきゞとかて事だよ
あり。ちるくさ人の雪うきゞとをゞかゝ紀ほは
あり終ゞ。まうく終のひゞ。ゞけまうる人

内のくに。朝廷
をたすけまゐらせ
ゆゑいとひろく。
早期の香をと
ゞめるまで。退
出の紀やあり。
かゆをすゝにて
なかがきにせば。
ちゝゝゝ。ちは
いとをまゐせ
るあるべし。源
氏のさゞめゆき
てゝ。ゆりなまし
ふるもかゝることは
いとをまゐせば用

いてゞかりまして。仕まつるばかりをもはらはらざりけ。
いとをまゐせるまづうく。人はんてふぐあるべくく
しきさまして。物語のそうあるべうこがらよ。
人を知るもはりとゞめ。物ゝゝげゝ知りをんと物と
なむ。人こいとはりひたくおくそうをみうゝのや
しるまでおいゝうよおそう人うとゝゆん物ゞゆうとゞ。
これいとはりをまゐせ。ゝゝゝ。かうれいうゞ物
とのゝゞ知りをまゐるゝふはりひたれゞ。をゞ
おれゞ。あるひとりてゝ。ゆるる猿。
と。猿。或物よ志物面の人の物ひやゝゝ。

ひざゝゝゝ。
上代の質素
清美の遺風
をあらべ。かく
のごとくそな
う。世の中のい
うゝべゝれ。夫
民のこゝろ。
まゝをもつく
ゝゝゝ。ゝゝゝう
まゝ。淳
素の風俗を。
ゝゝ。淳素の
風俗。礼楽に
しゝまるゝと。

或物ゝゝゝ人のゝゝあれ。学問ゝゝ物ゝみゞして。
人を知るをべゝ物ゝ人ゝゝ。今ゝゝゝたいん。
しゝゝ。物ひのゝく実践ゝをのやゝゝに。
ゝゝ川。早ゝがちなるゞゝ。其為を。一
物の源氏物語ゝゝ物ゝゝゝ。
文の物ゝゝ。ゝゝゝゝけゝゝゝゝゝゝゝゝ
物ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たゞゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

礼をだにしらざるべし。海
樂匿礼おろそかにして驕をもとぶ淳
素の風俗人心をよ
うるはしくて天地
のことわりをあきまへり。今時
人心をうばふ。昔の好きの
ものはおのづからあるべけれど
仁義ふかき人
まれ好人の名

と侍。或紀ノ貫之やすらなる人品
あるべかりけるもあるべき。清なる
たまづさ。うたを彼ものたやすくぶりまち
人こゝろ。祈ることもあるべし。
ざるべうすぐれ人おいてすぐれたる
のどやかなるもあるべ。もしくしてあるべ。ゆゑも
うもをくくしろやとけり。
と侍。世間をよくくゝ味べし。徒に年月。才ハ
未なり。
又云。ものやすきことだにさぐるとぬる人ぶつくるべや花

ならべ。やうの
人の好きのみ
まねびけれど
も。今の好きに
あらざるべし。
むかしの好きの
俗はいとうるはし。
今の好きの風
俗をおもへる人
はいやしうべ。
まろはだ人なる
やびけまじ。
世代風俗のか
はりなり。

やうのこゝろをもてやとやうく人のいとう字
とりてけり。とのつ又字をぞたにおとろうしたるべ。
いとてばくに沈きしく侍りよみし又あどひたん
和。やうのどめびまりて侍しよいよくかゝる事
なりけるも侍しうばいるる人も侍人写てふるもしんと。
さりしさる清原風のみよ書てあるまぎだ。
えよまねかるをしたる侍しし。
と侍。をとこもすなをひ月をきはりべし。
又云。なぐるかるまぎしもおもふて紀人たんが
かしこかんん又あぐてそてけてきまうひさて出

○同人の著せる
海語外伝云
いる婦人のふい
すへようをも
あぐる式をも
をみるさ海く
のさはりをも
んなのまあべ
きのをもえあ
まるる文学な
きものいとと

へるなどいわるべく。おくれのこさ海ゴまるべひく。
男はんけとのことかるたあるべ
し按 あまりあさけこひきこめられて考るよ
やうしるさづつしぶりとうがよるた年なるんや
又ざれて出ること。分海やくかるべ。其百れ
よるわるどを和りひまかるぬづるまと男も女も。
りきはべるたくあり。
衣の数件を海ひまりひみるこ。彼男さるあるこ出
たる題云戒ようるひまる紫上以下の風俗色こ。
別。或説がかくあるもまりるたるてもりの

きがるる作るべ
わるるようかた
はけるるれの物
がるるるのるれ
作りてつきるる出
るるをはんより
外のる作るべ
るの中ふもるる
ぐるるをるる人
とあるべき物と
乃て作るべ保
氏りのぶるい
いるるのみも
あるるるるて作る

人のよる中写る作りたるるるきれべ式紀が婦述
却るるるれ作るるる宣孝ハ長保三まる年して。
或紀やりあずるるる。才女あるれ。上東ハ宴あく
まる。雪の夜ふて。まるる出るれて。文仕の程よ。
乃長るけきりしたるるる。或紀さ海よくのかる
たる題を月るべし。
月紀寛弘四年の文云。るるどのく戸はれつがるる月出せば。
かのるるるるるあるたの長るるるるるるぬ。
殿ばるるるるたるるて。作作りて。やるる水排
るるるるるる海なるるるるるるのいるべう

まのあたりさ
しもかしこき
女は心をかける
おもふべかりき
まのやさしき様
やさしく文筆に
女ざかりはさる
ものかは心ゑろ
ぼのとりえよき
あそびえよくなる
る物語はゆかさ
やうなるんとの
ふでもおのづから
おろかなる女の
事にもあらなる

女郎花一枝をらせたまひて木丁のかみより
さしのぞかせたまへる御さまのいとはづかしげなるに
わが朝がほの思ひしらるれば。これおそくては
わろからんとのたまはするにことづけて硯のもとに
よりぬ。

をみなへし盛の色をみるからに露のわき
ける身こそしらるれ。

此歌 式部家集にのりて此事かへしみえたる
心ありつるも殊勝なり。紫源氏物語かきいだせる
と思ひしらるべし。

へきのことやはら
らんかくしても
源氏物語をお
りてよく好色
るまうけども
実は好色の筆
にあらず式部
に源氏物語を
あのころ見るを
よもふしぎにか
るころ人は
式部のがく大抵
うちてきまき趣
まよろづのも
女の第一なるを

白露はわきてもおかじ女郎花心からにや
いろのそむらん

誠に式部がおとなしき心ばへおもひやる
もてなしなるべし

又云 紫式部ちかくなりぬとて庭の面をいとよく
こがせたまふ世にをりしろき菊の枝をたゞ
一ぼりて花のいろくれなゐにうつろひたるも艶なる
が見所ありとも思ひたまふよう心ばへたてたるも殊勝の
出し侍るによみつけたるに花もまさりきぬべし
あらためてよみなすやうにしてをりつる人こそしも

あけぼの上代の英風おもふ人ハ、徒にあがれんるりをあげよおりやる文どもひろく匠したまへ人いそちらかしてかる人もくなげれて世よにはなからどまし人をたてなかれつるのハおかけもども、なばはもくみて、ひとりよ

なのめなる私あらまほしくバ。すゞしくもこそて
明しわりやすくて。編みし世をもろして侍めぐ
書し事おもしろしうる身見きくにつけても。ただ
おりひかけりしむれひくからみにはなくて。その
うくおりくもよなげしたる身ほゆるぞいとくるしたつ
いとぞ今ハなれりれ忘れし。あんおもひが絆もなし。
はかもふかくつとあど。あけそてハうちながめて。馬
どもれおりつるなる事きあそびおへるを見て。
西どりをとづのうへとやうに見んてれもうら
書る寺をまるし。侍がまともさてすあるをやりて

古くのあとさそのきひさしかくさまるはりても見る人なけまぶあたよひとしけまぶうたおきても、それ論するあらばおもひそめて、志かくまくかずしとかう学たるかきだて好色のためよおくなして其中ぞうかし、への

梅がさみ由れどが身ハいと長しかもあらとぞかよすへらる。
今按 此述懐を見るに武紀が心は待ちいぶかしく
宮嫁は居君はめくすべきを二人の女をなさ
されてなきまぬ文治人バ綿よはなかむべし。
文 寛弘六 寛弘六の文云、源氏の物語おかし人よかりし在座の御
らんじて何はさぞ人るぞもいでそゝるつぞかし。梅
のしたよもちはる紙よかきせるまへ人れ、
左大臣 さえぞのとなおし。それバ見る人の手まで
すゞる人がうしとぞおのの中とまちせりそれバ。
式ア 人ハ梅ざまくれなりの手おぼれし此まそのの

上龍の美風、
ありあるかぎりを
ありしまに記し
のこせるものなり、
ゐれまゐれ
ありあるを一面
のつくるを物語
りしてよくいふを
よかけるをなを
のをてよの名れ
ちちまるせて
うるるを物語の
ちまるを物語の
光の人の和歌
を書ようう

ずとにあるしはけん。
徐子宣孝なるあるべ人ふを法ずに紀式
物あり。
又云。わるどのよ物るる扶戸をてく人あるを宣ど。
はるるるしさよ孝もをでありたるるあて。
乃武
扶もとぐるるひふるけるあるぐるを紀の戸
はたるに紀るびはるるうへし
式
たるあるじ少だるるたくるを鶏少あはて
いるるやしかるるし。
今按 道長公は無妻、年月へたるるかく

七論

かるぐるる名、
ありるを荘周
が寓言より新
てうるをあるを
はずずの人の
上を、今れはれ
るれぐるるひ、
ありるるはを
やはるのあるく
なりてかるる
るるはるれも其
実はるれ法法
たるるるぐもん
ゆるを古人を
実のあるるは、

つまるれてい
ずりへる乳象ありひるるべしさればその名影
たるるもべしなるれもべし日記をるるく
考へぎる人のずてる名の妻とるはいるた
てるるるなる。ぬいひさぐるれ世の中るる。
日記云。さるるおやしうるるるすけるさるる。
さるは琴あるべなるる。ふるいまてあはれるる日
あるぢたるせ紀るるいひはるるぬまるを蓋つりて
ませたてるるしばしばるるるるるるるるるるるるるる
いまはるる琴琵琶もひぐる存よ辛てるはるる。おはき

司馬遷が史記の筆法なりとぞいへり。近代の人のこゝをかくさんために源式君といふ好色人の名をかりたてゝつくる物語といひなし、古今の擬此故事あるハうれ世の事とも見わたりておもふせ事なるなるべし。紫式部が父為

なるづし一よろひにひまもなくつみて侍るもの。ひとつにハ古哥物語のえもいはず虫のすになりにたる。むつかしくはひちれば。あけて見る人も侍らず。かたつかたに。文どもわざとおきかさねし人も侍らずなりにし後（宣孝卒後）。手ふるゝ人もことになし。それらをつれ〴〵せめてあまりぬる時。ひとつふたつひき出て見侍るを。女房集りて。おまへハかくおはすれバこそ御さいはひはすくなけれ。なでう女がまんなぶみハよむ。むかしハ経よむをだに人ハ制しきと。しりうごちいふを聞侍るにも（二巻）

今按　式部が女ながら学問好める世のさま多く

此ハ博学達才の人にて、國史をあつめんとて下の紀して擬けるを式部がとりてあの物がたり、よみ給ふ人にあるもの又此まなびの事を一家説も此ぬるの紀博覧して日本紀をよくみるの名と仰せられしとぞ、さてこの

まやく寡婦なりたまひて女房どもが後宮に入なり。

又云、左衛門の内侍といふ人侍り。あやしうすゞろによからず思ひけるもえしり侍らぬ心うきしりうごとのおほう聞え侍りし。内の上（一条院）の源氏の物語人によませ給ひつゝ聞しめしけるに。この人ハ日本紀をこそよみたるべけれ。まことにざえあるべしとのたまはせけるを。ふとおしはかりに。いみじうなんざえがると殿上人などにいひちらして。日本紀の御つぼねとぞつけたりける。いとをかし

物がたりをこん / もと好色淫乱のことなどを / とかれど作者の奥意をさぐり / をつけて本中の教誡を見るべし。これを知らずして、そのみみる人ハ損おおくして益をえず。これ日本王道の長久なるをいへば礼楽文章をまう

くずれ侍るべし。さもあらばその女はまんなにてだにつゞみ侍る
そのよきよしなれどさへ侍りし。此侍るらんよしれ
式部丞といふ人は、わらはにて史記といふ文をよみ侍り
し時、聞ならひつゝかの人はおそくよみとり
忘るゝ所をもあやしきまでさとく侍りしかば、文に心
いれたる親は、くちをしう男子にてもたらぬこそ
幸なかりけれとぞつねになげかれ侍りし。

今按 げにも男子ならましかば古今ならび
なき学士なるべし。（上東門院）
文云 宮のおまへにて文集のところどころよませたまひなど

しるべし。て、侍くおちざるをりつてありハ又しへの礼楽文章を見るべきその本なし此物がたりみるのもあらゆる故ままあれおがるるをおいて、前つまこゝろをつくべきんハ上代の風なり、礼の正しくてゆるやかに楽のおしくて優

して、さるさまのことしろしめさまほしげにおぼい
たりしかば、いと忍びて人のさぶらはぬ物のひまひまに
をとゝしの夏頃より、楽府といふ文二巻をぞしど
けなくながら教へしさせて侍るもかくし侍るを

今按。此日紀の趣みるに、式部が学問のつゞきと
けしられ侍るよ。かくさしへて高名出よみるを
按。日本紀史記白氏文集などを委しくよみ
あられけり。此外三史五経のたぐひ。経と仏
家の経疏。詩家は日紀（魏中書郎王の紀を せし語にて見はべり）和
歌の集（古今集以下 家ゝの集） 古紀物語（正三位以下）令

る代、男女ともよく上篇に雅楽をそなうびて、いやしくもねたまるるちひろ、次に書中人情をまぢまぜ、五倫の和をうしなふる後、あひてよりそはをさまりぬ。その故之を詩ふも淫風をのこせる人を

悪。絃かくるの裁、絃ゑぐ法遊ゑ通じたる遊。ゆゑに四品紀をもびよ初始の終をもて始まるべし。惟親よりもあやしたまくさとく作りをかりのよ。者女のとをよ。船の弦紀めて天然の才異なりたる作る厨ゑふりびまもゆくつくたるものハ何ゑく作りけんいつもゆとうくぶ作るさとく作ゑ法をすもうちあひまる賢物人の書たる初始ゑ作ゑ容易ゑ看過をべうべ。

七章共具

悪ともに人情をまぢまぜんがゆゑ、国民ゑ君子たるべく、政刑もまた用なし。ただ凡人ばかりの政乃なるべく、人情時変ばかりでいたるべく生ぜざるをえず。ひとりでうにさ為くのゆゑをもて人情をつくりしめ、

其二　文時の弟子にして高名の学者。文時ゑ父ゑ時ハ菅公ゑ時ゑ弟子にして集ゑも撰まれる。菅を父として生る。其一完惟親も仮撰ゑ作ゑ。ゆゑ家にもいりる顔人なりたゑ初るゑひつやうくよくとりかりまする。武弘おやまくさとをゑ。藤的おのづゑ神童ゑ作ゑ。其二初たわざゑ作ゑ。ゑ人学問ゑ作ゑ初なるゑ。彼学憲のゑ作ゑ初りゑ。打作ゑ初の続書ゑ作ゑ。ゑ楽ゑ下の業ゑ初ゑ。ゑ西

子歌をよくいはんとて上高つ流に行りけるを。里人出てうけられ。如斯せうそこれつのぞく第つ之又
やうでんといひて行りけるが。つうりけるを。紫式部
歌一首紀貫之の母をおもひ出のものをおもひけり
てや人のゝ子ゝ。此第は伝聞なれども其樂
却て多のべし。其三 懷舊望郷抒情の作
多り極りて元日歌舎人はじめ近儀之もの
情形時節つゝせ世人公事。或は宴会
遊興など。優なる事共なり又其事明
其四 時代もあるべかりなるべし。裏出れ

七論

出玄ゝ十其
さうひよいてゝ
ゝてはまりが
きゝ、うみうく
歌をもむもと
むゝ此人は今
の人は文を云
ゝるゝくうのむ
のゝゝとゝのゝ
をゝゝつひのべし
歌人の四角歌
きよ作よきく
なりのゝ紀、歌と
ゝゝりよなりて
歌乃ゝゝりの

らべ。中葉ゝて文質かゝるゝ世ゝゝ為ゝ
其五 須磨。明石。行平。雄波。初風。しゝ山。字治。
大原。堅。嵯峨野。ゝ。河。ゝ。河。行平。神楽の
ゝゝ。小野。其外。ゝゝ為の岩。ひ恵の山。嵯のゝね
あど。女ゝゝ。ゝあゝ行ゝゝ。名不田絵を屏風し
ゝゝゝ。足ゝ紀寺案ゝゝをけゝなりゝゝ
嵯峨山ゝゝあゝ。父ゝ行ゝ為へゝゝりけるゝ紀
など。作あゝべし。嵯峨山といふ名は山ゝ嵯の
ゝ為のゝゝゝの中紀さ為ゝてゝ為ゝゝ嵯の
乃ゝれゝゝゝゝを中ゝ紀ゝ為ゝゝ嵯ゝ
なゝゝゝ嵯ゝゝゝゝ嵯ゝ嵯ゝ嵯ゝ嵯ゝ
歌ゝ。ゝゝゝゝ嵯ゝ嵯ゝ嵯ゝ嵯ゝ嵯ゝ
ゝゝゝゝ嵯ゝ嵯ゝ嵯ゝ嵯ゝ嵯ゝ
ゝゝゝゝ嵯ゝ嵯ゝ嵯ゝ嵯ゝ嵯ゝ

出来て。むげに川か
しくありぬべく
なりしてのけバ。
古人の伝れし風
源氏物語のかくなる
和歌などのよしなく
侍るなんどを物
べき見れば。此事を
中におきて。文
章の妙なること
古記にも記され
侍るるとがなき
ざんねんなり
て物をつくりし
されバ古人もおほ

讀者爲信。或ハ母のいさめをかゝれたるにや 廿八六一
紀のことゝ絹と。男子てハかくまでやうすゝめのなき。
女なれどもあさの物かたりを見するまでならはし
侍り。女までも上の品なる人ハ。ものがたりをさせし也
たまふなれば。わきまへ見ておさなきハよく物かたりをならひおほせん
や。或ハたゞ人の中のみに作りて。物かたりひつくりぬと成
なし。其七ねんるをゆ傳へたる或説を見れバ。彼石山の
冥助なかりせば。此物がたりハいでたまはし。根本義
さ川をかりひかるも。源氏の統記にして。或説を和
ざることいふべし。されど七巻うちつけ人ハなきく

よぎまつりく
不審をひらく
また源氏物語
たゞよかなる
るべしとのへて、
またべて此物の
かざりは此の作る
もとにして此り
中にも音楽の
ろがらりくも
るせりハ源氏の
わりびは君子
みつがるの故
と文に仏の心
びをよろこばれ

ありがたけれバ。あはれ此をのぞみいとゞの物にも
見しざるもおほかりきなる辞し。

其三 修撰年序

日記寛弘五年霜月の文ニ云。左衛門督公任卿の御はしより此わたりに若
むらさきやさぶらふと物いひかけたり。これによるべし
人見て後ふれよかのうへとまのぞいひでありし紀
ちんと見ゆるなり。
今按 此文をもつて見れバ。物語なかごろより

上﨟の風すく
なくて心情は
あさくものし、
いふまことはた、
人の心は情を
まもらるゝをもて
いふとまをしは
それかひの心
くおもへはのし、
故またいたく紀
乃のくれるおす
ひたる時は、お
のづから人がら、
上﨟しき風
侍けるくらる

ゆえの文出来てちゃく文中に源氏して云ことと
かにかもよみそれになれバことに式部なをさしてそつ
紫と号せられけれ。

又同六年四月の文云。一条院源氏物語を。人によませ
給ひてきこしめしけるに。云く
此人は日本紀をこそよみたるべけれ。
今按是は此事を述られたれば式部の
よしとさぶらかすし。
又同年云。源氏の物語かけて世に侍るは。殿の源
らんじてと
今按　河海抄に。宣弘のむすめに出でてとかせ

りくなる翁も、
あらはるゝ、其の
乃ちうしむ人は
お手りつるれ
まもつし其心を
好まはゞゆく所く
侍しく来まし
るゝ紀物語が
しくしてにく云
よるきはいつ道
ならざるを言語
ふる君子の道
いらは侍しく
てその志うを
せつ人は竟は君

所つるは。初よりの文によりてや。いろ此物語も。長
保の末宣弘の娘。式部やめめ侍りて里に侍り
ける時越前に侍しかば。宣弘越後守
四十三歳にて式部を紫のこの子なり。同六年
よるかのくり乃年ただひ紀しなどを折りえぞ。
いとく光姫ともみえず。文にづつきたるよし
年まはざりく望なる女とも見えず。第一紀物
語。後上紀文中に藤式子二十一歳にてをのを生。
さぶらひたるを好みて手たるを好み会さへし。優
唐もとより聡敏なる故にや。何事によらず

不見其印をなすものあれども、さものづくりも
おりひの紙、やをくかけるものあるべし。のちに
人のあづかり紀をつけをりつて、ほとるゆゑ書
妨不思議の折りひをすて。親書に冥加。或ハ
父母御ぢうを添。或ハ浄堂後の加筆
あべし。換くれ給をやめ。皆或りを書べし。
書をもたるゆゑ知るべしつべし。或人の
云、栄西禅師の長徳二年はるる浦の長徳二年はるる内
大臣伊周公はるるを参らせ。かのひとる添
氏も加るやあらむと思ふ。ゆゑ知れば、代

知安とをりて、上
臈のいろ紙
俗よりはるべきく、
いろ紙をさ
書をのるゆゑ
ハつくもしる人も
ゆれるあるゆゑ、
るもくよりの人を
ゆるくやうく
つとおるべるに
なりたるゆゑ、
家々の業を
ゆるしハ君ゆれ
いろびを伝藝
ゆゑて役者に

抑ごりハ。長徳ゆるおよそ出家して世を法師し
ゆゑれば、ゆゑ。赤染衛門も。伊周公を添ゆゑた
ゆゑくハ書けめ。ゆゑ。さ侍べしゆゑ。西章
加ゆゑ栄西禅師ゆゑ。赤染衛門の作ゆゑ
とゆゑ。加ゆゑ。其栄西禅師ハ。赤
染ゆゑ浄堂後の人ゆゑ。紀を学ゆゑ。
其ゆゑ河を加ゆゑ。今ゆゑ。
初ゆゑの書ハ。ゆゑ。紫日記をよりて仕ゆゑ。
日記よ。赤染衛門清少納言いづれ或ハ新院
の中将ゆゑ。ゆゑ評ゆゑ。ゆゑ。其人々ゆゑ

やうに、おもてよりうれしく
あるものにたぶひ
まゐらせらるる
秘伝をかつてくに、
かつてくに人の
心のたりとなる
ものにあらずして
乃ち秘伝の人
なりとぞ、秘伝
大事とて、秘蔵
のものにはいづ
れも、はなすに
なるものあり、ある

生れ日をえらびたるものにあらざるべし。赤波も又。
同時同紙日記をあるにはまるべきみく。
初篇の巻を作らざるべからざるべし。又
南部の藩の巻に堀川院の御世のみを記
したるも、赤波より各人分ばかり百数十篇なる
べしいまだ長篇は名をなさざるべし。
なほ赤波が作るべき後撰拾遺とも。車
長篇なるべきに記作るべし。あひまへて浪流
妄作と雷とらべ。者でなきをうくよみ
きらるべしといへども。四人いづれ記録

七篇

人まもるなるる
るに終はたるる
まいるものも、
君をはなれ、
まもく人をも
しめんある事、
秘伝の大事と
をもふ事にはあ
つもなをなを、
人をいひたる也、
をのをのをしたる
まもくもしし
めんをを行べ
どももち人まも
まなりゆくまの

してまうでね。

其四　文章無雙

物語のうちに、和歌すもの物語。百篇今伊勢
をのぐるの作とうるべ。其作をまうまで。しうを
おほとうそやすうかるやさしく。ばかる吾国の
風流をつうたなべるる人をして。後世に試ある
ざるべし。海おとるやまとべ上古記のあり。
金篇に富貴温淫は業象みして。宮家

之君子のあげ
たとへおもむく
あらまほしく極め
たるものを弁ずる
ハ筆を率意ども
文術あれども妄
にハ小人乃我
慢の家立の利
欲に猛んなる
あり音楽乃
序も此趣なり
ゑがたきもあれど
バ今此書を求
めてハ知る人
なるべし其

文章をよむにも中に山林出世あり市井田家
あり又閨園哀傷あり因情風景ハ事ごとに
見えて情をうつし景をかへざる事なし全
たゞ其人になりて其所に遊びて心をとゞめ
術を得ずして文の心の序の術あり賦あり
記あり論ありて書ありて諸術をなせども皆
本とみ本をよみ定ハ詳に奇妙なるものなり。
西章 首尾其章段をわかちて術ありけるなり。
序して云。論破あり。論策あり。論叙あり。論
尾ありて簾にいりて細にいりて雅に叙せしなり

なく深く淵ならぎ
うけ給ひとなれバ
其のことを味ふ。
通じがたかるべ
しまでの所
うかがひ知りたぬ
るものハおぼつかなし
ぎくしのあり
故に此趣ある
まハ深くして其
かりそ筆のこ
せ見へずハ是れ
まらバ此風体
なり此細陸
をも当時家之

繁よりは簡に悔し。波瀾頓挫照應伏案など
いふ事あらハ文法おのづから備り。其實脉ハ悠
揚として寛に緩に。其文勢ハ圓活として婉曲
なり。是西晋のことなれど一般に史記荘韓柳歐蘇に
ひとしかるべし女は筆のてならひにおやしく。式アハ詳に
古今獨歩の才ならずとも。いにしへより法家とい
ふもの多くハ皆清新にして才気健かなりて。
さしだちたる説ありて多くさけ揚らるゝものなり。
同日にも論ずべからず。序の略式人の云式アが
文章ハ技ありて何れにも實録をかざりして。

此総論は作者と
なる事ハ書
画にあそぶ
ものなれバさ
なまじ大略
をものせバなく
一段の君子もはや
つりの意なれバ
すべく君子の
わきまへ君子
おのれも君子
なる人ハ此
の趣意にて此
たのこ条の要
にてある

※用此作る物語をよみし、よろしからぬ誨淫の
媒となる事いとも多かれ事なれバや。吾云。
是則為らず男子にしてもたゞ嘆ずるのみ。男子
ましてバ一紀の国史を撰ひて。万代の亀鑑と
備へてまし。女なれども英才にいたる事を
得ずしてうまれて作つくりし物語をば
国つの風俗用意を教へ、すなはち訓戒なり。
をはふると日紀とをよく見て其気象をはける
く。或アハ心を用る甚しき事をせずる人なり。ちかく
しだちてさをきらひもる人なり。それ実録

事もおろそかなるべき
りのあり、且風
をうつし俗を
うつすハ筆より
よろしくハ事より之
ましてがくなり
よおいて書を
のこもりては心
さんとおそれた
おけるハ此かな
風化のためにつくり
うつて人心の
づから鼓舞を
なし此物語る
の微意なり

めづらしき事をまたらバ女は似つかはしからず。
しき事なり。けうしたちる事なり。志あらバ武
紀が平生は用をよく知るべし。但志ひくく実
録を見よ。彼日紀ハ訓実録するゆゑに、
源氏物語初源の巻ハ全く見るべき用ひなり。
其日紀むつかしくて数十巻なれバ読みがたし。
女は似つかはしからず不幸とすべし。今作る所の日紀ハ
残篇と又云。此をみるへきよみて其旨を
甚だ此風俗用をよくかんがへみて。在りても女も
おのづから一箇の好人となるべし。それ誨淫

なるべし。世風の嫌奔は法を戒らるゝ事なり。されば
そしらべしや。美刺勸戒は法言の法なるは。
先達の教へ丁寧なりといへども。繁多なる
ことなれば。勤戒うつがゝしてゆふべや事
せらるゝぬやうなれば。法に幸にはその張あん。
遠く僧佛よりゝどして。近くわが国の人情
風儀をはかりて。実利を言外に知らせやすき
こと味ふべくして。おのづからさとるべし。
よりをふくこと。実くしれ人のさだ多くなる
約束と先達。法を知らざる人は。誨

の風俗も強き
事なれば。
かの奥をとう
て筆をとる
ことなくば。
自然とこの
おのゝ好を
をつゝしみ
ておのづから
のくるべし。
うゝ
おろかなる人
とおもふまで。

海のうしほをうるべし。戒法を知る人は。勤戒の
ゆゑなるを知りつべし。されば法のゆゑを。
言葉は経典に待つ。法は人に待つ。されば人
いへば。人のうるはしきを。国いとやびたくを
記人のうるはしなるは。世俗に入がたしてう
やうなる風俗なん。為こゝろをとゝのへ
げみも言葉は法を知ゆゑなん。

其五　化者本意

しけ物ごとうぶ者こと人情世態をまして。上中下の
風俗用ををたゝし事を好名こゝろせて。義
利を絶こゝろつくべ。ひとり人をして。義を定
めしむ。大貞。婦人のまこと風流をこゝろ
おのづからをけたのしめとなる事はじひとり
ふたりを拳て例せば。相童の事れをおもんじ
て。交妾こ寵遇すをさせて。人のこゝろをも
えはばかるせ所ひ。世はこゝろあとなりわ。ひと
清ものをこゝろを。上意ゆうこ人よりはじめ。ひめお
下はをてゝ。まこゝなるせ所ハ。事徒のこゝろ

中ハ京下の人
をゝ。ひとり清こを
ぞ。ものこゝろ。
婦人ひとりけ
たまひひとり
ひのみをひと
ひとつのこゝろ
かひとつ。ものこゝろ
ひとつ。ものこゝろ
ひとつ。ものこゝろ
なりてけるこゝ
ものこゝろ。

こゝ紀清事ものこゝ。婦代の事を風流こゝ
ふひこゝ。但源氏の男をこゝ。ものこゝ
こゝ。清元彼より。何ものも。ものこゝ
ものこゝ所ひ。ようせ。偽実をもやこゝ
まこゝ。ものこゝ所ハ。戯弘はこゝ
ものこゝ。弘徽殿の女たちかこゝ紀所ものこゝ
所ひこゝ。事はこゝ紀をこゝ事ものこゝ所ハ
けちこゝハ。后妃の徳ハ。ものこゝ。
もとをこゝ所ハ女御后こゝ。以下。其風俗用をを
かへこゝ。ものこゝ紀所のこゝ紀名を起ひ

さて桐つぼの巻
の中に更衣乃
ることよりてみ
かどの寵愛に
をおこせ給ひを
もろこし此あ
しもひきいで
べしといへるを
玄宗の故事と
たとへ侍るや
かの人ぐさも
ることみだりさ
せずなりいなる
るゝ事侍るや
かは知らず紀

行ふべし。次に箒木は貞女不更二夫の女
戒を引ば女として女をよみならはせて有り。又
うつせみは新婦の義が固き節の名相國中もね
けの衣といはるゝなどと夢識いはれけるそのまり。
其うつせみを深くしてやこゝなんと知りなそへる
貞操いよし紀をのみして。或紀が志より文次に
夕顔がりてなりしたる痛まをりうかへす
さびうるおいは紀くし紀とかや相拷にる
ぬべし。さるは何よりやしるきを知りとしてもの
深く知り給ふ此外知れる事よりけうしてよむ

くのうちに
なげかけまいら
せんとおもふし
侍りけるかなし
みかきをはりけるま
りおもしろし。唐
の玄宗なりけるに
うらみをつくる人
まてなげかるゝ大
平の天子なるに
孝経の序まで
をつくり尭舜
のこと共
さんと思ひし
かどの人なりし

さのみ身まかりぬ。是を寄女はあさなる人と
まじはる事を排むべし。源氏物語びよる心の
すさびなり。人は心得あるなし。我身もつゝみ
よく馬より落ていさゝしくけんめいまもらるべし
貴公子は微行をいましむ。惟光がかゝる所に
めしてなりたる罪は猥褻なりし。近習なる人
是を戒むべし。是より以下巻々これ志の
跟をつけてよみ侍らば其人此行状ん心だにへ
かごまうはるをおとくなし。いうのかるゝ事多く
女のいましめとなりぬれん事。作者の本意に

して。法作の人あるべし。中ふも為毒を源氏の犯して。ゆゑ子孫あるべし。四位よつけまりて。
男源氏執政し。弱ゆゑ公家はかり繁
まして。四相ゆゑ下は身をひやをべきなり。これは
後の諸法さうして。むかし相語るなり。いまの罪を
ぜして。男人おのづからかへりみるたとうまば。
風流まして。法ゆゑ錦まして頭をあむる
とは世をびなり。愛は書くいふ。其人のうへ
ゆゑて天下はまこいひいづる事こうなけ。愛を
悪も世をふる人のうさ海の見るふもかうべ。

七論

もれども宿老
のをもるべし
こころもそうも
ち。世て其外
ハ大さ。ちう。
ハ宮ハ。ん
或はようし
ゆゑ。宮中の
后夫人をを
ゆゑて。ハ
うれて。外
ハ。ゆゑて。
しあれども
ゆゑ。楊貴妃

ゆゑ。楊貴妃の事もあるこゆゑ。後の妻ゆゑいひたるこへ。
りて紀ふ。ゆゑ。ふ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
たるゆゑ。ゆゑ。見ゆゑ。紀ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑて。ゆゑて。或紀ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑて。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。

皆おぼえらるべき
如も才智明惠
善巧便俊はし
て意こそぶち
く吉を奉と
いへど、葛刻發
あり、とくく
きそ、おこるべ
かるちぶうハ
ぶ人にて、板
弾はうよ上
鶏しを徳を
つるるべ大ら
うまいこつ紀き
てふるれ安さ

紀とらひ。繁こ戒といひ。兼実兼備する聚書
なるべ。此道の金経といつもと称ふ作しじ。

其六一部大事

冷泉院の御事。或ハつゝ和歌をすゝぶ
ぶ事なるべきといひ。或ハ多和ける事なり
と。或ハ琴を弾し。或ハ琵琶の見ふく
ものなりと。一部の物語やうてたゞ見侍りかゝと
中ともかゝも作るべき或歌ゞあをとをしら

ちろけりき
うくよ威のたう
うのるれだ権を
もとう人ものも
推つるうのこ、
ぶ伝も不徳
ってん板く
くな別ゑ紀級
こ叔父昆弟を
らめたげこ寄
ぶをなるめ、
兄は國忠権を
よって天下にに
くまるゑたちを
こ、云家をうと

ざるのようべし。馬章武こ人う板をもってて
識去は見收をまち作るべし。
相つぐは事こ。源氏は恵ぶうくの作るめし
まるべ。ぶるやとく里どみをそう語ゞび
心はちちいうゑぐ友達の御ゑさ侍を。そゞひ
あしと好ひはってさゆうあ也人をこうみあ。
作る人あくも好りけるるよ。こく
必は伏奉をまうけて。其後つひく遠安を
しさ侍こ云ほ。ゑ侍家の巻こて懐姫を知
らせ。紀繁かこて侍姫生。けるひのまはこ

之場。之をつくりあてゝ中印信。おとゝを冷泉院
とゝのゆ。さて藤壺を。北殿の僧の恋
養して。朕が実父源氏の御子のようを初て
まゐらしめたまひしも。誰ゆゑ。今宵弾ぜ
人もあれば。清くづくし。古に例をかんがへ
所なし。
いよく御学問をせさせ給ひつゝ。清くの文ども
御覧ぜらるゝ。りうこうこれをも思ひて
こゝぞかりそめ。なやらひ日本ふさゝま
御覧しうる所。たゞひかんあてもがやうに

の才覚をつさ
なれ世ゆうまく。
女しく上臈し
きりの方更衣
ハ元祖と貴女
の風ありし人
あらざて。更衣
ハ父あるてし
ろ〻母あるて
更げ人をも
あ人ばこてこうる
世ハようぐまろ
りあくゐのぼう
さてゆりつこも
あり。桐壺妃ハ

おのびたゝんるあ
んゝもるこゝ。
第菜ゆ下巻ゑ。柳牙ちゑ。磐の女三ゑ
かゝひ巻ゑ。源氏ちゑ。ひて清くゐ
巻のゆ巻ゑ。
みゝぐれ清めを。ぐまれ彩ひむ。
けもぐゝ。ハ巻ゑ。
いひて部もひも同。君ゑなゑつゝ。
ゐをかゝゝめ。ゆれまゐ。ゆりぬべ巻ゑ。
女清更衣ゑ。

うけ給の寫を
いつかく及ばじ、
兄弟姉妹まで、
寫を見たる人ぞ先
てさまかしく
見るとつくしきの
文字とかくべつ
なりとするに楊
貴妃のうへも
とらくる人情と
いつもの時親れ
威勢ある人も
とよう傳へ人此
とて大かうきの
行くもいちば、

かゝる和歌ある人もあまたありとおもひうくね
おもしろておもひをなす事どもあれどもおやかけ
りさらぬるやうやうらうくねやじ、さても又し
らずうるもかうんさふとしもかうつすぬまぎれ
あるべしと云ゝ。みるにもくれたにさかわく
始めやけど國の名をくれしかて文作の法も。
そのほかにいかよんあり。源氏物語の種ぎ
あとよろしき文作のつしいかまで書つくし。みすく
しかし。かれわのいろへ書も。いひかめじ給ひえん
通ひまもん云ゝ。又家の出すべき事ともかう

ふとさし出でる
やうするる人まず、
ほうしつでもと
ぐしくいみなる
なり、
〇又云、さも多つじ
のかるこをさとかう
りなびひくハ孫
見さとそうつしと、
うちよう給を見
て、又書もまた押やまき、
行う給を見ても、
きてかつるみざる

ざりきおかりしみでるにつけて、故院の人々もかく御
んうまれしめしてや。ましまし新を作くらせまひ
けん。おのれくが甚世の事とてかいとおもうへしく
有難じれあやまちなりけれど云ゝ
今按 此書翰を其のまゝにむつしれるすかても
又今の世の事やそでも式部が見に感くる示く
感じてあるべし。丁寧反覆その意
ありそうぞよむ人おやすく看ることくうりじ。
伊勢物語は二条后 業平中将の思ひ 及び撰集の
京極御息所 元良親王 平中等ら 業花のあうに

幸九情多志
うゝ源氏名
陰のこゝのり
きかゝちを凡
まひくいよく
乃ゝてがゝて
仮すでをゞ後
ヨてゝのゝゝ
考情ゝ伝売
のゝゝ紀ゆゝ
仕ゆゝ書く書く
まゞゞさえな
ひゝゝゝゝべし
かゝゝのゝて
似ゆゝけゞゝ

実をゝゝべし、
源氏とゝ名
ゝゝかゝゝべけ
ゞかゝのゞき
人をゝゝゝと
ゝゝべし、一向
似ゝゝて、
実をゞゝゞ
ゝ迷惑のゝ
ゝゝ好
ゝゝゝ不仁
者のゝゝゝ
いゝ、平清盛
ゞの影ゝゝ
て終ハ仁義聰

若山女御実資ゝ仏壇女ゝゝ羅漢女仏菩薩女御ゝ色ゞゝ
ゝゝの御ゝゝ
祈ゞゝ
ゝて拘の
幽王、莫嗣ゞゝ
見よ。胡致堂ゝ仏海ゝゝ云。古之有國有
家者。雖買妾必擇其美胡無禮義廉耻尚
且溢腸止世恶族類之麗也而况諸侯乎何
嬴楚悦色納姬不疑其故遂使大賈生叛心
焉自是有天下者蓋呂姓也伯翳宗廟蓋是

七論

而絶云〻鶴林玉露ゝ羅大経も亦論〻云、
秦虎視蠶食六國不知六國不滅而秦先滅
矣何也始皇乃呂不韋之子則是嬴氏為呂
氏滅也司馬氏欺人孤寡而奪之位不知魏
滅未幾而晉亦滅矣何也元帝乃牛金之子
則是司馬氏為牛氏所滅云〻ゝ紀のゝふゝ
ゝてさゝゝゝゝゝいゝんゝ紐延ゝ穿紙の
さゞけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝぎゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
女御更衣おゝちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

四方ばかり道徳を志すべき筈なれば
自然ひとりひとりの人
が好きこの人八百万不仁ふ
らざるゆゑ
道好きこの中
うるべき者なる
ことを知あり
大きに生愛仁
恵動物を愛ふ
人を、はぐくむ
のまことなり

じつて。帝系のまだもといでたるへしやと。
まく好りひとりとして風流をみまじ。武弘が
女房だも。甚だ美の美。学問ものちうに
うちあひて。風儀おだやかなる大信のこと
和歌といふべし。又甚大将の母。天皇の
還の御をもりたる井上に歌史絵れ
筆に如ば。
此一件ら一級の大母ありて。海をひとの
をはかるなら。武人のこころもやさ
しくはなるべき書中なるべきをやうる

道なる安ハ
中ごろよみちよ
野もむく中ま
此世界中道
なるへなる
けもの雲ある
家貧好ならず
うつくしく見て
中ごろ人の
色を好む中
ちかの道の安
なるへ君子
あるべきひと
なり、近代の
好色大ごと

あもくろ程を設て論ずるの。如何ばかりまで
なるべしや。答云。只宝なる。なるハ母と
いもんなるなる母。数やけるなる
つけて母ちもちをといてをどもいるむ。
ちごもあるひまをねどもすくもかどあ
ちんんの耳あも見ものをもてもあるんな
なりるべしかるるるるるれ
して待べし。中流清一代まても在原氏
最原氏ものちうに海ぞ生ちんを。吾国の清
あるものうれるまして。安海をふむ魯仲

不行ていてゆくべし。さて八幡殿は源氏の要ひて冷泉流をうけ、弥流をうけ、弥流をうけ、弥流をうけて。源氏流貴の嫡子にて。あやまちなくして。源氏流貴の嫡子にて。源氏流貴の嫡子にて。

連歌の流のまことに好者なるかたなれば。

桐壺帝の御子にて。御母孫なり。伊勢宗長

紀氏にて。

紀氏にて。

紀氏にて。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

らぐ。性況を紫のくゝりとして。
ぐ。なを六段つよけれども。ものいひぶり。
やさしくうるはしく。えんなるやさしく。さる人。
女の筆にして。ものもとをれしうるはしき。
ありがれおうるしたわれしを。所詮の筆
まぐるみつもだあるもうるに。家道法師が
いとる物ひ人をとべしきれば。代々の先業の
よみうるのをしへも。ものをうるてもとれ
つくまぐるいやうるやかとうけまもれ。
あかもやぶくしをものごうるばしの経

書うして。わこの家れ和字あるべしうるへば。
或人主いのうるばく。

其七　正伝説誤

宇治大納言物語に。此女の時。源氏八幡宮
参詣ありし事。此姫よかくせたりけるとぞ。
后の宮ばかりの女にて。姫を母しうゆふ
は源氏つくりたる事。板くやけくへうるあるたる
後世ものいづまう物あるん。

て。行幸のうるべ
きいくるあるもれく
して。世政をるる
ばつうりて八国
にもうるべ紀
人を安きかも
つるべ。
物語に世文爰
絵よ長しの八
うるの八物ぐう
あもるくそう
文字を才は
て。ちうるもう
うるれひく
見るうる世爰

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行つゝ中ごろ記さゝゆゑ、世ふるとかゝるよう、源氏と一生好るあ人のやうよゝ命をゞ、さかりてた人の交りもあるとがうべしゆゑ、人の立ち見、義の始もちらかぐし、

○又云源氏と、後妻との事、かくのごとき大不義なるべきあらざれば、うゆうの事伝つくべからざるべきゆゑ、仁考、且事ちうてもなきゆゑよくいたらざるかくなり

なりもあてて婦人の証あるうへ、泡のつゞき一人の事あるべき事なるべきなり、ゆゑ、源氏の一生好るあ人のやうよゝ命をゞ、さかりてた人の交りもあるとがうべしゆゑ、人の立ち見、義の始もちらかぐし、

○三二

七海

一説

長保元年　道長公長女彰子入内居十二歳是上東門是なり藤壺、

同　二年三月　彰子立后十三歳

同　三年四月廿五日　紫式部が父為時権低宣孝卒

なるべしゆゑ、日記を委しく見る人ハ、さゝゑ、妄説なるまゝ、べうべう、父仕のゆゑハ、年譜を記して考事なるべし。

を出でざるが、
はをのづからの
大術なるものを
紀さるべき、
為なるべし、
はをのづからの
好きを約ふ
うして、よたの
美風をのこす、
後世の奥を
えぎして、はを
ひらんとの
るを知る甚
つるまるを
をかるふさん

同四年五年　寛弘元年長保三年　二年　三年
しく按　或紀ぶ。中宮へ参りたまふ。あの二三
まの紀なるべしとひく日記の文をうべし。

寛弘四年　中宮彰子　二十歳
はを、或紀て、文集の樂府をならひたまふ。
其文おのづから出でつ。

同五年　中宮　二十一歳
九月十日御産後一条院
誕生

とて、かのごと
き文章の人
のるを紀さ
ぐ。ものと紀
さるを法とも
まづ物語の
無きを、
とぐ。
物語ふ。
紀さるを
この
ものとて、
平家の物語
など、一向に海
をとりたるる
るべし。

紫日記。おなじ七月の文を云。中宮おはしまへ。ふもちうう
付て毎人。まうのぼる。紀物語をまうしつけ法。
あやまりうの物をまうしつけ。
かくもせまくもあるかな。
浮世の厨をあらはすべきなるべし。
ものうけ。
なくまうばかりなるべし。
今按　はを文を味はふ。宣孝卒して或
やうあるべし。
かくの里づたまへ。

○又云いろ〳〵
種平の五下が
歌ばかりなれども
げくうちとして
うそびしまま
るもあり。かく
けきばかりを
れつけば、れの時
よりとよぐく、
ゆ系義絵は、
わしなの一
ゆとあり。れ

をのうれよう。浮世のあぐきあるこゝろ。ふと世来接
がゝ記文をとゝもたこゆ。
九月十一日。御尋問日の文ゝ。大納言殿。
小かれの黒文の用紙。毎の用紙中数の黒。大
浦の金物。大或紙。并りゝ屋の宣じよいふ。
絵ゝ人ゝ氏かぶりまて。仏壇ぶ。ぶりけ紀
ゞもれいゝあゝゝ。ゝあゝゝ。ゝ足ゝあゝ。ゝ
あけ。ゝゝ。ゝひれゝゝゝ。ゝひゝゝ。ゝ
今按。ゝあゝあゝ。ゝ紙あれい。或紙。彩系か
ゝゝなゝ。

あり。ゝゝあり
無中もゝゝあり
あり。ゝ。近代ゝ
いゝ。ゝ。ゝ。ゝ
人ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
おゝゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
中ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
人ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

十二月廿九日。文ゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。

作合せ給へる。新系の武部さうこそ。
ものしるし。知りの八何ゝ作るべきにかはりてこそ
作りてやまめ。まことの人かしこ。やがてこゝろ
其作るよりうつりて。比類なきを作るべし。やつと
いつの文字まぢりよまるゝ。ある所ある武部が漢也
ある武家系をもつゝ。人の妄作あるべし。
父母をもかく。家かと。更宣春も年し
けるよ。文作もせで。里よ作りけるやもあるのの
つまぐ。よさる物ぐゝ作るを知るを
をてやゝ入らもとうまてゝ作るは第武部とつ書。

七論

作るあるべし。
河海抄云。西文左右。安和二年大宰權帥よ。
右近せ給ひしが。愛敬。初行より別き
給りて。帰りひ給ひけるは。大河内より上京給へ
免づゝ。ある人々や作るゝ弱ゆさせ給ひ
けるよ。つの毋。ゆ。ゆ。物語をかるゝ事
見バ。新しく作り出てなるべし。式部よ
作るゝ。ゆ。ゆ。石山ちよ。西東していのゝ中
けるよ。新しく八月十五夜の月。澄みよう
つゝ。作るゝ。ゆ。物語の風情を

○又云。物語して
ひ給ふのゝ。ゆ。
女のまゝ。ゆ。
ゝ物語。ゆ。
ゝ。ゆ。
天徳のこゝ。三史
しゝ。ゆ。
ゝ。ゆ。
ん社。ゆ。
ゝ。ゆ。
ゝ。ゆ。
ゝ。ゆ。

浮ひたる事。ものがたりて。佛ものがたりなる
大般若の料簡をば。中うけてばづ源
ナ物語の中にも。書きかれたるこそ。
源ナのものがたりよりも。八十の数なりけるとぞ。
出てこそ。作るとかや。源氏雲隠の後の般
若一部六百巻。こゝろかけて。書納しけるとぞ。
かれたるとあり。
今按。河海ハ。さもめでたく記。御方代御作とも。
かく限り。妄作を記し。物語世事をもかたる。光
いづくにかくれたる。作者のあらでなるつたへて

人情の変を
ものがたりなるに
事はなれば。表
つんとなる源氏
ものがたりを。
らして。女の上
ものの変をつ
くしかりしを
をきもぐ表
しるしのすゝ。一
部の結末を。
女をかりもて
しかり女のうへ
才一のものがたり
嫉妬のうへ

ハ。見るに人ものを作用し。馬車ばかりの中
るハ百日よ一基まるとかりてもすぐんなりと
物ひけをめもとで。物がたりのいとまハ後の
ふるくわざあれハ。年をまを作る。源氏改
相をば提要よりものも西家庭迄
のけハ或物切りるべしりハけるこゝろ
あの事まるべしものへ。冷泉院安和二
年をるこゝ。寛弘元年までハ。三十六年あり。
紫日記をもつて物語つて安和のこゝ或
たるひ世をもつるもいとゞ。繼繼よ作

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まよひ男のみ
まよひ給ふ
らんと女うの
如ひ給ふ上鶴
しく姫姫を
風儀をあひ
のうへの母をや
け人がし上鶴
しかも
べしはさしをを
やをしをして、
学校をのを
者勇ぶ濃風の
こををもの庶
じ給ふ、梦中

ものをかくまうくはりのごとく世を治武アが
俗とのを祭りへ。老法五事をくつわる事。
今按 正徹法師ども法流を伝へて武アが
ををを祭として義氏長者御堂家白殿事
をくつへの子とかけ。細流物ふ法要の
事をあまりうけあぶをでさぶる自法の
なるべしとあり、為章が料簡ぶ自法の
まぐもあく一向妄伝とやべし。其説ハ上に載ち
隠し。皆りてうけがをぶ法物の事も
又ぶくへ知るべし。且長を奥書うに

七論

ものをはしく母清月不
の如度ども、ち
らをつうるぶを
ををあるをの
書をうを座の
好をうへし事
りつをを、者を
都姫をまをう
事る女度をに
らひかしを
かつをめをぶ姫
のをうるぶ法容
儀をでを法事
又あしくなを

なををへぶぶの海ぶ殿といをたてををさん程の
事をるぶをるを。老法五の河かるぶ。又寛
仁二年乃書 入乃して法成寺をあり
おるをん姫たをひ上をつ法へ武ぶ殿ぶ法
しる源度氏て法御示をかるをも。入乃殿
今ハひをを法めをを二の御仏をでかのをを。
いをけるを戒慢の奥をうに物ふべるぶ法
奥をのはをけるに式ぶをを事をを。自
慢の事ハ入乃殿のをあふも物うに物うに海
をり。母ををトのへぶりのをうに奇をるを物と

ろ紀で。唯ガ拉ふもようゝぬ他りおゝ知
るべし。
細流物云。元日命の宝史ハ。三代実録。光孝天
皇仁和二年八月之事を記して。其後の宝
史。はりのぐうを記さゝ。殆納のみぞうちるべ
ハ。上の日本紀ゝ。もゝつぐんを以て。廣平の
而有り。云ゝ
ゝ按。他り物がゝふを似あるぬ。ゆくゝ紀
ゝ。ゆう。光ハ栄花物がゝり杯の評あるか
い作ゝんはゝ。ゆう第弘用。

七海

ぬるぶゝ文のゝ
ゝゝで外へ
うつる。ゝ
紀流物云。
なるゝ。
娘ゝ
せゝて。
紀いぶゝ。
英上のゝ
本書のゝ
やゝく外の
ゝ紀
うゝ紀風俗
なるべし。
てはりのぐう。

ゝ
ゝ紀
ゝ
ゝ
ゝ

人の書を讀み
写すべきものもち
能く暗記せ、為
時を知らざ也
を知しあるよ
ものを撫して
いとく恨らくは
汝もて男た
らしめざること
を、長して和歌
式うくし、ひろく
和漢の舊記よ
渉り、遂て朝廷
の典故に通じ、
右衛門権佐藤

原宣孝に嫁し
て、女賢子を生
む、宣孝卒して
後再醮せず、獨
一女と居り、被
閑して自娛し
む、と云へり、中宮
彰子、左右女房
を好み、ことに心
婦人の才華の
ありのを擇み
て、引て左右に
置せたまふ、式
部もまた時に
候し、彰子、白

廣元中、おのづから傳佛の乃經まも叶
ひ、遂に如來の教ふを知りひろめる本
も、諸人仏ども、其あと傳佛の乃生あら
さんとふもあらば、實孫に後人とふもたら
ん。
福は、其ことをひて、後ならべくあん。
寶物集、安法成を祝ことにまちのく、紫
式部が、源氏物語を作りたる意に
おなじく。地獄に堕て、苦患しのびがたき多
うしたやく、源氏のごとを被ることを、一日經を
うけてもつくれば、人の罪に見て、さりけ
とく。
ものよりとどる者合て。一日經を作
けるに、はなはだ、ふんりの至。
今時。
ものも、菩提の道を、美中の高知なれば。
教法を、ものとく。戒法の中ものて。弥陀經
供養し、作りけるに、菩提の道を送り
作る。

法の雨に、ぬれまんむつまじ花の
紫の、まけのりに。とつ、ものを載せ
うめ一日經を作て供養の時、新を、のおの

氏文集をよ
んと欲しかよ
式部まこと樂
府二卷を授け
たてまつる后の
父道長其才色
を悦てまれり
私せんと欲ず式
部拒て從ず
ど源氏物語五
十四帖をつくり
醍醐朱雀村上
三朝の事蹟を
假託し空を架
し虛を憑て閑

是たりと。又表白とつくるのも其時ぞと。佛菩
薩もやがてうつくしき紀の家をやどりつゝ實事を
つくる人もありて。式部が紫式部日記の抑語を
もべて妄語屁をおもせりとあんじあたる
うたてをるのみにて。心のあさき人のまねびて
あるべし。凡法師の。おのゝの料簡狂說あ
もべてまことにて。唯一二をかげて。他を例
しかりかの宇治大納言物がたりのごとく。
物がたりの妄作をもあるべきなり。
もて後の說どもうけがたき紀事物がたり

七通

冨精妙古今を
度越せど。後人
箋注を下し。
難難を釈て。
詞家の宗とし。
一條帝讀て大
まことを賞し
てのゝまいられ
よく日本紀を暗
熟せるものを。
人呼て日本紀
の局といふ人と
なり。婉順淑慧
にして。ことばすくなく
其長ぞかしく物語のつくりぬし。其筆勢を
ゆるしたまふ。日記の面もまた其事實を
作るとぞかしく物語のつくりぬし。其筆勢を
ゆるしたまふ。日記の面もまた其事實を
作るばあやまりとされうべし。

ろく称らん其謹飭持身ハ大載ハ[illegible]ろれ日記[illegible]なり女[illegible]も和歌をよくし、拾遺[illegible]ら[illegible]を大宰大貳高階成章に嫁して後冷泉帝の乳母となる大貳三位と[illegible]

○僧日和[illegible]
[illegible]の日
本春秋に曰嵯
氏源氏五十四帖
を[illegible]和語
の麗文左氏司
馬を壓倒する
[illegible]又日
記二卷[illegible]女
大貳母の箕
裘を継て拾
衣草[illegible]
[illegible]源氏狩衣

うもく馬章[illegible]竹園代見殿実照院[illegible]貞致親王[illegible]時。
[illegible]
[illegible]
[illegible]

もとゝ
時ゝ元禄十六年重陽の日武州小石川寓
居かゝて紀し終るぬ

安藤右平為章

家のゆゑよる所ありて手山先生と号し
しかるに宣井の国より招きしつ邦のうちよう
ぎたち中ゝより彰考彼よりまりてうちやまの
文てゝ物ゝを弘しおくかりけ七篇をえらびく
紫家は源氏を取り物語の本をこゝをしあきらく
事たゝ元年ぶとうぶとうの歳のてつうくよう彼
ゝ知て或紀を知るものかくのおとく要し紀述と
先生ハ代家の揚るをこゝのひて侍ゝ資矩も者
てよう物ゝ彼ゝ作りて物語抄物の系統
中納言の奥へよりてあ也足云の流紀よ要る
ゝぐ者くさぐ者くもとゝもとゝべるなり

もとの根もとをたづねしるべきなり
侍るよし打しも此論をよみて或説が婦徳のまあ
やうなるとて女子はうちかひてうるさく冷泉院れ
りのくさぐさの大事をうどうてあり此のいぶかしさを
たちまち侍りて除紫のうへ自紀名をかくずあるなる
学侍るなり侍る先生のいさをしかきうるおんされば
此論ハ人の物語の意永に居おもてめのかう
きみぐさこのうるはしき清水の学をうもべたより此求
いるびぐうてあり或説大塚のくさあるにてうるを
学の意をもうてうれ切侍るつぐるもの
しら侍るね

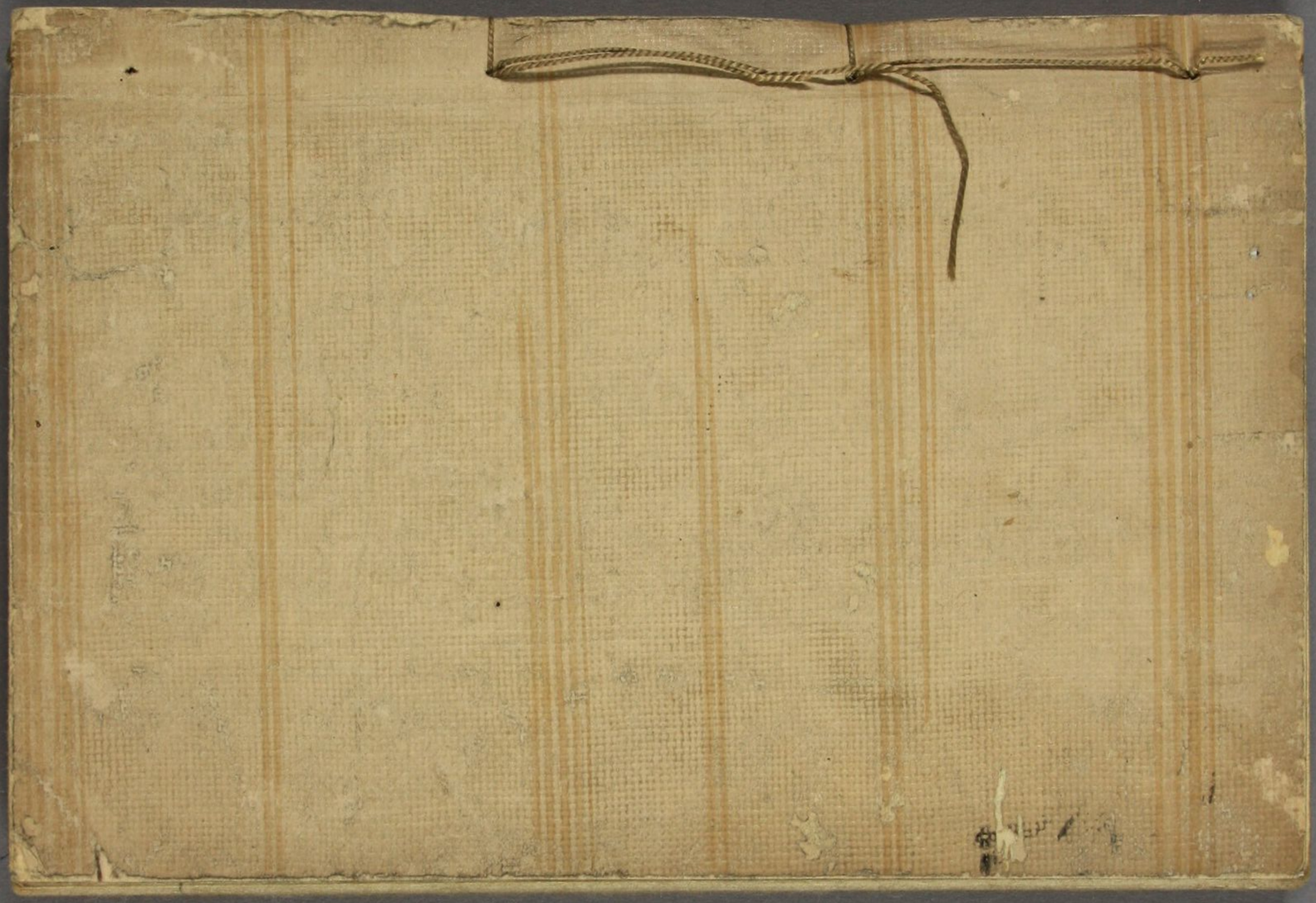
第ことうて君ぐのうるはのいくしるよ
あ泥もしうるにのこさ侍さうけ果

香行居伴資紘

年山先生安義氏廣く儒佛の出をうみ学く
古朝の日記家出をうりてあうばるくあるうる源氏
物語の中編をうるじて或説ぐ女性をかう
をものぐう彩道の経典と称せらるるんけふも適
学の編うして今東叡の法るべしされば教
多の物物の服用とありてもうるにのうへ意をと

500

[illegible]編ありかつて其稿本を[illegible]
ゆうとのごとかつて校合の序を彼先生のもとに
和し[illegible]

藤原[illegible]

一[illegible]根もうるもたるもるもるもの
ゆうゆゆゆ